

尾崎鼻天神と土器屋

会員 安部 力

水立の沖区は、村祈禱という行事が毎年行われている。その内容は知らないが、また何時の頃から始まったものか不明である。村の親睦の意味から始まったものだろうか、また言葉の意味から判断して、村の平和祈願のためだろうか。

戦前はよく尾崎鼻の天神に参拝し、出征兵士の武運長久祈願等も盛んに行われていたようである。また村に重病人が出た時等も、村人全員が参拝し、「千巻心経」奉納により、病気の平癒祈願なども行われていた様である。喜びも悲しみも、村人全員でわけあっていたのである。

この沖区とは、昔は大分県南海部郡水立村中野川内字沖とっていた。沖区といっても二十軒そこそここの小区である。今では此の村祈禱の行事も昔と違って、正月二日がこの村祈禱の日と定められ、その年の区長・班長など、又の代表者選出の行事のみとなっている様である。

昔はこの村祈禱の座元に選ばれた家は、随分と御馳走も出して、盛大に行われていたようである。昭和の初め頃、私の生家がこの村祈禱の座元になった時のことである。夏の暑い日であったと記憶している。度一本、直径一肌以上もあるエノミ(榎)の古木があった。この木の蔭に蓮を敷いて、この村祈禱が行われた。行事の内容は記憶にない。

村祈禱の席上、父が尾崎鼻天神のお社の建立を提案し

た所、全員一致で即座に決定、建築が準備にとりかかった。これまでは、石の祠が天神宮として祭られていた。

この尾崎鼻天神は何時の頃創立されたのかは不明である。佐伯史談第一〇四号に書いたが、空曆(一七七一)の頃佐伯藩の宗門奉行土屋亦兵衛の手記になる。御領分中寺社記の中に、尾崎鼻天神は記録されているが、尾崎鼻天神の記録はない。

これについて、迫区の守田要吉氏は「迫又の天神様が地名に尾崎であり尾崎天神が正しく、沖又の天神様は地名が尾崎鼻であるから、尾崎鼻天神というのが正しかろう」というので、尾崎鼻天神と書くことにした。

空曆の土屋亦兵衛の記録にない所を見ると、この尾崎鼻天神の創立は空曆以後と考えられるが、沖区が成立した空曆以後となるのだろうか。またその頃は、沖区と迫区は一つであったのではあるまいか。近くに松樹寺の屋敷跡という所があり、屋敷内に萬々五〇m程の石柱があり、空曆の頃の記録らしい文字があるが、読むことが出来ない。佐伯市史を出して沖区が成立年次を求めた。

が判然としない。市史によると、享和三年(一八一三)佐伯藩が幕府に提出した「郷村仮名附帳の控」に見ると、水立村中野河内(目筈、迫、宮河内、大野、鷹、岡、

榎 敷(長野、大中尾、西野平、岡山、前道)

と記録されており、沖区は文字はない。また明治六年(一八七三)、海部郡は第四大区となり、その二十八小区が、水立村、吹浦、地松浦、沖松浦、有頭浦(桑野浦、日清浦、

帆波浦、額浦)

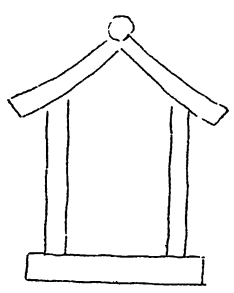
となった。水立村は海岸村であったように記録されている。このころ行政上の都合から、沖区が誕生したのではあるまいか。意外と若い村の様である。

尾崎鼻天神は沖込の氏神であり、また信仰の神社であったのだらう。私は子供の頃兄達に引き連れ、お献燈に尾崎鼻天神に参拝したものである。子供の多い時代であり、男の子も女の子も五六年生にもなると、皆に赤坊を負うたり、小さい子の手を引いて仕事の手伝いをして、お献燈に参拝していた。長さ七〇cm巾三〇cm位の順番板と、当番の旗が順番に村の各戸に次々と廻される。この旗は「天満宮御燈明」と書かれていたようである。この旗の廻った家が当番として、お献燈に参拝していた。

その頃の尾崎鼻天神は、今の所より約五〇m程北の山頂にあり、参道も北東の山麓から登っていた。この登山口は昼をお暗い杉林で、子供の頃はこの杉林を通るのが淋しく恐ろしかった。この杉林も食糧増産時代に伐られ、開墾されて立派な畑になっている。

現在の尾崎鼻天神は水立沖込の地名尾崎鼻にある、霊場依例四圍八十八ヶ所十四番の札所、松樹赤の境内を左に、五〇m位登った所に祭られておる。私は昨年春久々に参拝して見た。拝殿に上って寄作の札を見ると、建立に關係した当時の人々は、もうほとんど亡くなっている様であった。

社の裏手に昔のままの古い石の祠がある。この祠は高さ六〇cm位で幅が四〇cm位、屋形造りで、この型は明治の頃流行したもののようで、側面に次のように彫られて



明治二十九年正月廿四日
 世 松 本 要 吉
 語 福 泉 清 治
 人 阿 部 小 吉

次ぎは、尾崎鼻天神社建築

に使った瓦の物語がある。瓦は、鶴岡土器屋の瓦工場の製造に合ったものであるが、その工場名はわからない。昭和の初めの頃、秋もたいふ寒くなって来た頃、注文の瓦が出来たとの通知を受け、村人が船を仕立てて、瓦を渡取りに行つた時のことである。ちょうど自浮八幡宮の秋祭の日であった。すぐ近くのお祭所で奉納相撲が行なわれるというので、積荷はそこそこには瓦と船に積込み、そのまま帰れば問題日起らなかつたのは、船を土器屋の岸につないだまま、一同急いで相撲見物に行つた。

相撲が終り、船の所に帰って見ると、瓦を積んだ船は転覆し、船底ばかり光っていて瓦の影は見当らぬ。さあ大変と瓦積み連中は、かあるが川に潜って見ると、潮が満ちていて、深い所で泳いだことのない人ばかり、川底までもぐりつく人がなかつた。そこで吹浦生まれの父が呼び出されたものである。

川に潜つた父は、最初十枚束を両手にかかえ、川底を蹴つたが、水を十分吸つた瓦の重みで落くことが出来ぬ。そこで傾斜になつた川底を歩くようにして運び上げ、焚火で暖をとりながら潜ること數十回、最後には屋根の両端の鬼瓦(シヤチ)、三つに割れていたのを割れた瓦の中から探して拾いあげ、合計一〇〇枚ほどとともかく船に積んで帰つた。大変な作業であつたらしい。

今でも天神の屋根の鬼瓦(シヤチ)は、当時の事件を物語るかのようには、折れたのをかがり合せて屋根にのつてい

この父は日露戦争で金鶏勲章を賞っていたが、真面目で、冬の夜の長い時など聞憶りの日方で、この話をしてくれだ。

その父も亡くなってもう三十年にならうとしている。

(おわり)